

2023年3月5日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「わたしの主」マタイによる福音書 22章41-46節 高橋彰

◆ダビデの子についての問答

22 ₄₁ ファリサイ派の人々が集まっていたとき、イエスはお尋ねになった。₄₂ 「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」彼らが、「ダビデの子です」と言うと、₄₃ イエスは言われた。
「では、どうしてダビデは、₄₄ 灵を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか。
₄₄ 『主は、わたしの主にお告げになった。
「わたしの右の座に着きなさい、
わたしがあなたの敵を
あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』
45 このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」
46 これにはだれ一人、ひと言も言い返すことができず、その日からは、もはやあえて質問する者はなかった。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

エルサレム神殿において、ユダヤ教、ユダヤ社会で力を持つ指導者層の人びとがイエスに対して敵意や妬み、疑いをもって挑んできた試みの議論のやり取りもこの段落までになります。最後はファリサイ派の人々が集まっているところにイエスの方から言葉をかけて尋ねました。それは「メシア」についての問い合わせでした。

ヘブライ語で「メシア」とは油を注がれたという意味を持ち、イスラエルの伝統で王、祭司、預言者がその使命に任せられる時に神からの特別な務めに従事できるようにと、聖別する意味をこめて、頭に香油が注がれたのでした。(出28のアロン、サム上10サウル、サム下5ダビデ、他)。イザヤ書45:1ではペルシア王キュロスについてもそう記されます。バビロンを倒し、捕囚に遭っていたイスラエルの民を解放した王、神の救いの御業を成し遂げたと考えられたからです。そのように、人びとは期待をこめて「メシア」を救世主として伝承してきました。神の救いの業として世を支配する王であり、その身をかけて神と民を真に仲介して関係を保つための祭司であり、神の眞実の言葉を曲げずに人びとに語り告げる預言者である「メシア」です。そしてそれはイエスの時代の人々には、千年前のイスラエルの最も繁栄した栄光の時代と言われたダビデ王の末裔であるという言い伝えと結びついて語られ人びとは期待をかけるようになっていたのです。「メシア」と「ダビデの子」という呼称が結びついていき

ました。マタイ福音書でも何度も人びとが「ダビデの子」とイエスを呼ぶ印象深く記されます(9:27, 12:23, 15:22, 20:30, 21:9)。

メシアはギリシア語に訳すと「キリスト」です。キリストについてどう思うか?とイエスは問われたのです。そしてそれは実は、あなたがたは私(イエス)を何者だと言うのか?という問い合わせでした。ファリサイ派たちはイエスの問い合わせに対して、自分たちが知っている「メシアはダビデの子だ」と答えました。するとイエスは詩編110編(それはダビデの詩と題されています)を引き出して、ダビデ自身がメシアのことを「主」であると言っているではないか、だからメシアはあなたがたが思うような「ダビデの子(末裔)」ではないのではないか、というのです。

マタイ福音書はその冒頭から「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」とイエスを紹介します。そして何度も「ダビデの子」という称号を書き入れました。しかし、ここでマタイははっきりと、その称号は当時のイスラエルの民の思い描くもの以上のものであること、つまり血筋による証明などではなく、さらに人びとが期待するような、有能で権力をもったメシア(キリスト)ではないのだと、イエスご自身が語られたのだと記しているのです。その「メシア」は、ここから先、イエスという方において起こる受難、十字架の出来事において成し遂げられたのだと、マタイは書き綴ってゆくのです。

- エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の靈がとどまる。イザヤ書11:1, 2
- 見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄え、この国に正義と恵みの業を行う。彼の代にユダは救われイスラエルは安らかに住む。彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。エレミヤ書23:5, 6
- わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それは、わが僕ダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる。また、主であるわたしが彼らの神となり、わが僕ダビデが彼らの眞ん中で君主となる。主であるわたしがこれを語る。エゼキエル書34:23, 24
- 【ダビデの詩。賛歌。】わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」詩編110:1

教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かったこどもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救い主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenantと言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教員の、第二に教員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用していました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。